

「引揚げ文学」の問いを開く

鵜戸 聡

現代アルジェリアを中心としたアラブ＝ベルベル文学を専攻しております、鹿児島大学の鵜戸聡と申します。この度、朴先生のご新著の書評会にてアルジェリアのケースとの比較においてコメントするよう申しつかりました。アルジェリア文学の概要はここでは省かせて頂きますが¹⁾、普段、植民地期から現在に至る北アフリカの文学を読んでいる立場から本書の議論をあえて脱線させながら、いわば対象地域を異にするがための「違和感」をきっかけとして考えたことを読後所感として述べさせて頂きたいと思います。

まず、私が朴裕河先生の『引揚げ文学論序説』を一読して最も違和感を覚えたのは「植民地」という言葉の使い方でした。そもそもその使用頻度からして圧倒的で、最初から最後まで繰り返しこの語が文中に現れます。本書が主に取り扱う日本支配下の朝鮮や満州が「植民地」であり、そこに発生した「被害」と「加害」の根源が日本による植民地支配にある、ということを随所で確認している——もしくは身振りとして念押しせざるを得ないかのようです。もちろん本書は勸善懲惡的に作品を一刀両断するものではなく、むしろそこに描かれた人間の心の襞に分け入りながら丁寧な分析を施しているのですが、だからこそ、いわばアリバイとして勸善懲惡的な含意をもって「植民地」という語を連発せざるを得ないような力学が感じられて、私個人としてはいささか心穏やかならぬものがあったのも事実です²⁾。

また、その際に改めて疑問に思ったのは、そもそも朝鮮・満州は「植民地」なのか、ということでした。というのも、ヨーロッパ系住民と現地民の生活圏がかなりはっきりと分かれていて日常的な交流が非常に限られていたフランスの植民地と比べた場合、「引揚げ文学」に描かれた「内地人」と朝鮮人の日常は非常に近接していて（無論そこには抜きがたい差別があったわけですが）、両者をともに「植民地」として同列に論じることがとてもできないように感じられたからです。「植民地」の用語法に関しては当時から議論もあったわけですし、法的な問題としても歴史学の立場から研究がなされているようですが、何にせよ「広義の植民地」と言ってしまうと朝鮮・満州は当然ここに含まれることでしょう。ただここで少し考えておきたいのは、その植民地のなかにも相当の濃淡と申しますか制度上の差異があったということです。例えばフランスの場合、植民地の他に保護国、委任統治領などがあり、アルジェリアはフランスの県(Département français d'Algérie)として特別な地位にありました。当たり前ですが管轄官庁や法的地位、施行される政策において違いがあるわけですから、自ずとそれらの「植民地」の実態は多様なものとならざるを得ません。あるいは、独立しなかった「旧植民地」はいつから「植民地」でなくなるのでしょうか。植民地省(Ministère des Colonies)を引き継ぐ形で海外省(Ministère des Outre-mer)が存続している現状では、その境界は必ずしも判然としていません。米領グアムのように法的差別が現存しているケースもあります。にもかかわらず、「植民地」と

いう一つのタームで全てを（どこまでを？）覆ってしまうことは、便利なこともあれば、その内部に存在する無数の差異を捨象してしまうことにもなり得ます³⁾。

あまりに当たり前の指摘と思われるかもしれませんが、しかし、こと日本語で語られる「植民地」という語には、そのような差異に対する繊細さがしばしば欠けている気がするのです。ポストコロニアリズム研究の隆盛以降、この用語が一人歩きしてブラックボックス化してしまった印象もあり、学術的な議論においても時に定義を欠いたまま同床異夢の体をなすこともあったように思います。

この「植民地」という言葉が本書に頻出するように感じられたのは、私自身が普段フランス語や英語の文献を読む限りにおいて、一般的に名詞としての「植民地」(colonie)という語は頻度が比較的低く（何らかの実態を指すというよりも行政用語として見かける気がします）、大抵の場合は形容詞の colonial という形で目にしているからでしょう（個々の地域を指す場合は「仏領インドシナ」「フランスのアルジェリア」などと形容詞の française を付することが多いように思います）。この形容詞の「植民地的」(colonial)という語はいかにも曖昧で、およそ広義の「植民地」に関わるものを漠然と指示するかのようです。あるいは広義の「植民地」とは狭義の（つまり行政上の名称として法的にそう定められた）「植民地」に近似したものであって、レトリカルに両者を繋ぐという点においては一種の比喩的な性質を帯びているようにも思われます。すなわち、あたかも「植民地」であるかのような保護領や外地もまた（広義には）「植民地」であるという同語反復的な意味の拡張は、異なる二者を結びつける直喩（「ような」）が示すように、差異と同一性を同時に内在させています。

翻訳語であり漢字語である「植民地」は、「植民地体制」といったように形容詞的に用いられることもあるためか、この比喩的両義性（植民地ではないけれどもやはり植民地である）を多分に備えているように思われます。例えば、ある種の沖縄論に見られる「沖縄はいまも植民地だ」という言明は、「植民地のような／としての沖縄」(Okinawa comme colonie)と直喩的に言い換え得る隠喩表現と考えられます（発話者はそれが比喩的であることに気づいていないかもしれませんが）。このような用法は、少なくともフランス語の colonie には余り馴染まないように思います。しかも、形容詞は修飾語として被修飾語の性質を限定するものですが、この比喩的な接続は逆方向にも意味を規定します。すなわち、「沖縄は植民地だ」という言明は、沖縄の政治状況にある種の価値を付与すると同時に、「植民地」という語の意味内容に「沖縄」を加えてしまうのではないのでしょうか。実際にこのような比喩的用法が増えることによって、「植民地」という日本語に沖縄や北海道などが関連づけられることになるのですから。

してみると「植民地（の／ような）」という語は、形容詞的であり比喩的であることによって意味が膨れ上がった結果、ひとつの抽象的な、しかも極めて情緒的な価値を持つに至ったように見受けられます。それはフランス語の形容詞が定冠詞を伴って抽象名詞化するのにも似ていますが、その一方で、名詞である colonie という語が本来もっていた具体的かつ特定の意味内容から遊離することによって、確かにある特定の体制下にある具体的な土地（例えば「植民地朝鮮」）を指すにもかかわらず、それを超えた一つの価値であるかのように立ち現れ、抽象的で純粋な価値として、いわばアイデアとなってしまう。現実を超越した絶対的な観念と言ってもいいかもしれません。すなわち、漢字語としての「植民地」は品詞上の融通無碍によって、確固たる内

実を定めぬまま、いわば規定されざる規範となり、「植民地」と名指された土地に生起するあらゆる出来事の原理となってしまったかのようです。

この「植民地」という漢字語は、colonie と colonial と異なり、それらの原語より遥かに自由自在な用法を可能としています。先に、「勸善懲惡的」あるいは「情緒的」という表現を用いましたが、倫理的な規範意識（とそこから生じる様々な情動）に密接に結びついていることが何よりも大きな特徴でしょう（この点では colonialisme の含意をも超えているのではないのでしょうか）⁴⁾。「植民地」について語るとき（とりわけ非学術的な議論においては）、多種多様な事実の積み重ねから帰納することにも増して、この倫理規範から演繹的に（ときには権力的に）諸事象の価値づけが行われてしまうのには、この語が孕むタームとしての危うさが関わっているような気がします。力のある用語というものはしばしば語り手をも振り回してしまうものではないでしょうか。

その「植民地」をめぐる語りは、しばしば「受難」の物語の形をとるようです。それは朴先生のいう「帝国」の「植民地」に限らず、例えばブラジルの場合でも、あらゆるエスニック・グループが自らの受難の物語を抱えており、互いに競うかのように、いかにその労苦が凄まじいものであったかを語り継いでいると聞きます⁵⁾。そのような「受難」は、それを生き抜いたものたちの正統性（苦難を乗り越えてそこに在ること）を子々孫々にも渡って担保するかのようです。

おそらく最初に生まれるのは入植者の受難譚でしょう⁶⁾。入植の苦難と背中合わせに、大抵は遥かに凄まじい苦難が「先住民」を襲いますが、それは随分と遅れて語られることになるはずです。1830年のアルジェ征服ののち、「無主の地」を開拓したフランス人たちが自らを新しい「地中海人種」にして「ローマの後裔」たる「アルジェリア人」だと考え始めるのは20世紀の初頭で、「原住民」（indigènes）と呼ばれたアラブやベルベルの人々の受難はごく限られた形でしか語られていませんでした。植民地に生まれ育った「原住民作家」たちが、しばしば自伝的に、家族や学校や貧困について書き始めるのは百年を閲してのちのことであり、その文学が大きく花開くのは1950年代に入ってからです。そして、七年半の「解放戦争」（1954-62）を経て、独立を果たした結果、その苦難の物語は圧政への勝利の物語に反転します。

いま、アルジェ市内に天高く聳え立つ巨大なモニュメントは「殉教者の塔」（マカーム・アッシャヒード）といい、解放戦争の勝利に国家と党（国民解放戦線）の正統性を拠らしめるアルジェリア政府の、殉教／殉難（martyrs）を国の基とする立場を象徴しています（なお、この記念塔は紙幣にも描かれています）。独立を勝ち取った「戦士」たちはムジャーヒド（複数形はムジャーヒディーン）と呼ばれ、一種の特権階級を形成するとともに、生き残った者たちが戦死者を祭り上げ、権威と権力の源として利用して来た面もあります。アルジェリアのアラビア語文学の先駆的作家であるターハル・ワッタールの「殉教者たちが今週帰ってくる」（1974）は「ゴドーを待ちながら」にも似た短編小説で、殉教者を褒め称えながらも彼らが帰ってくるのは困っている人々の姿を鋭く風刺したものです。

独立というパラダイム転換において、「フェッラーガ」（匪賊）は「ムジャーヒド」と成り、フランス軍に雇用されていたアルジェリア人、いわゆる「ハルキ」（harkis）たちは虐殺あるい

は追放の憂き目を見ることになりました。受難の物語は、生き延びた者たち——とりわけ公式の物語を語る権力を持った者たち——によって勝利と復讐の物語へと変奏され、矜持と憎悪のアマルガムが形成されます。ドキュメンタリー作家のマーレク・ベンスマイルが2008年に発表した『中国はいまだ遠し』という映画作品は、「革命の揺籃の地」として知られるオレス山中の村で、当時を知る老人たちが殺害されたフランス人教師への好意を語る一方、公式の受難譚を内面化させた戦後生まれの世代が「フランス人による抑圧に対する抵抗」というステレオタイプしか語ることができないという、世代間の大きな断絶をスクリーン上に見事に写し取っています。歴史が物語として語られる以上、文学や映画といった物語芸術は、しばしば硬直したその語りを解きほぐすのに優れているようです。例えば、ムスタファー・ベンフォーディルの短篇小説「パリーアルジェ便、地獄クラス」などは⁷⁾、亡命先のフランスで客死した「ハルキ」の遺骨を故郷の村に埋葬するというテーマを扱いつつ、それと背中合わせになっているムジャーヒディーン神話を巧みに解体していきます。

ほとんどタブーのように、その存在が長らく語られてこなかったハルキと異なり、フランス人「引揚げ者」、より正確には「祖国帰還者」(rapatrié)は、独立以前も以後もフランス政治において大きなプレゼンスを発揮して来ました⁸⁾。彼らは、代々アルジェリアに生まれ育ったという意識のためか、「敗戦」という契機を経験しなかったためか、日本人引揚げ者がもつ「疚しさ」のような感覚は薄く、自らがアルジェリアに暮らしていたことに対して一種の正統性を感じているように見受けられます。それに、引揚げ自体も、七年半の独立戦争（フランスは長らくこれを戦争ではなく治安維持活動と看做していましたが）の最中から独立後の数年までの間に段階的に行われたため、満州からの引揚げのような突発的かつ極めて困難な道行とは相当様相が異なります。そもそもアルジェリアの場合はフランス系住民の残留が許可されていたので、一部の住民はそのままアルジェリアに暮らし続けたという経緯もあります（なお、予想を超えて残留し続けたのは何よりもフランス語という言語でした）。

このようなアルジェリアの事情に鑑み、そこで世代を超えて作り上げられ受け継がれる物語を考えたとき、日本の植民地支配が非常に短いものであった、と言わざるを得ないでしょう。以前、とあるアルジェリア文学研究の大家に「朝鮮は何年間植民地だったのか」と問われ、「35年」と答えるや言下に「短いわね。アルジェリアは130年よ」と返されたことがあります。朝鮮半島が被った「被害」を過小視するわけではないのですが、その「植民地」としての性格を考えた場合、何代も前からそこに根を下ろしていた入植者の系譜を持ち得ないことを「短さ」として確認しておく必要はあるでしょう。例えば、一部の引揚げ者たちに共感をもって主著『異邦人』が引き合いに出されるアルベール・カミュは、「フランスのアルジェリア」に生まれ、アルジェリアがフランスであるうちに死んだ作家です。あるいは、ヨーロッパ系住民が無意識裡に内在化させた人種主義を共同体の内部から巧みに批判したジュール・ロワのような作家もありました（『アルジェリア戦争』岩波新書）。朝鮮にせよ台湾にせよ、内地から来た一時滞在者たちによる文学作品を生んだものの、植民地に生まれ植民地のなかで書いた日本人作家を十分に持つことがなかったということは、「植民地文学」というものを考えてみたときに、何かしらある段階が欠けていると仮定してみることもできそうです⁹⁾。

してみると、物心ついた頃にはそこが植民地だったという子どもたちが戦後かなりの時を経て「引揚げ作家」となった例に朴先生が注目されているように、彼らは敗戦に間に合わなかった「植民地作家」だったとも言えるでしょう。この遅れて来た作家たちが、敗戦という決定的なパラダイム転換を経験したのちにしか書くことができなかった、ということも重要な点かと思えます。小林勝のような神経過敏とも思える作家が、疚しさと恐怖の緋い交ぜになったような面持ちで語るとき、そこには「植民地」というあのアイデアへの畏れが、自らの内に生き残った記憶と分かち難く溶け合っているかにも思えます。

ちなみに、私が小林のテキストから連想するのは奄美の加計呂麻島で「終戦」（出撃して敗れることもできなかった）を迎えた島尾敏雄のことで、島の住民や部下の兵士たちに対する引け目や猜疑心、誰かに見られているのではないかという強迫観念や得体の知れない疚しさの感覚など、小林と共通するものを感じます。魚雷艇の隊長として出征しながらも戦場を経験することなく、内地と戦地のはざまのような場所に置き去りにされた島尾もまた、擬似的な「植民地」から本土に「引揚げ」た作家と言えるかも知れません（彼らは入植した屯田兵のように、食料確保のための耕作にも携わっていました）。戦時における「帝国」の秩序が兵士たちに特攻を強いる最終段階に到達するとともに（島尾のテキストではあたかも世界が南島の一点へ収斂し閉ざされていくかのようです）¹⁰⁾、突然の敗戦によってその場の権力関係が揺るがされるのを島尾の過敏とも思える感性はほとんど予見的に察知します。

さらに、島尾とは九州帝国大学の同窓だった庄野潤三も、召集されたものの出征する前に敗戦を迎えたわけですが、やはり自分の死は既定のものと考えられていたようです¹¹⁾。引揚げ作家たちや島尾が経験したような「帝国」秩序の顛倒こそ感じさせないものの、予期された死を図らずも生き延びた庄野もまた、繕い難い断絶の経験を抱えたまま戦後の新しい生を新しい土地に移植しようと試みます。『ザボンの花』（1956）に始まる庄野の家庭小説では、新しく切り開かれた多摩丘陵に家を立てて暮らす家族の日々を描いていますが、これをアメリカ西部開拓に見立てる説もあるように、極めてささやかな形で彼は独特の入植／移民小説を書いたとも言えそうです。確かに、元いた場所から引っっこ抜かれて「ひげ根」を「断ち切れ」、これも「縁」と定めて新しい土地に「ひげ根を下すこと」に専心しようというのは¹²⁾、見知らぬ土地に入植／移民すること、あるいはそこから引揚げることに通底する経験ではなかったでしょうか。

無論そこには「植民地」の影はありません。しかし、例えば満州から引揚げると再びブラジルに入植／移民するという行為が戦前戦後を通して見られたことを考えれば、少なくとも文学という個人的な経験を問う営みにおいて、「帝国」の内外を問わずこれらの行為に連関を見出す必要があるように思います（あるいは「帝国」はどのように「入植／移民」を変質させたのか）。満州や朝鮮、あるいはブラジルへの入植は、生活のためのマイグレーションという意味では、戦後復興から高度成長期にかけての大都市圏への国内移民と相似的であるかもしれません。そのように考えてみると、郊外の宅地開発が推し進められ、よそ者たちのコロニーが切り開かれた土地に作り出される時代に、「引揚げ」が思い起こされ、書かれ、読まれたということになります。あるいは盆暮れ正月に「田舎」に帰省するという大都市生活者の行動様式との対比において、故郷喪失者としての「引揚げ者」の自己認識は深められたやもしれません。実際、昭和の文学に描かれた「ご近所づきあい」には、隣人の郷里の話がつきものですから。

以上、大変散漫になりましたが、このように、朴先生が立てられた「引揚げ文学」という問いの可能性は、このかりそめの枠組みを通して見えてくるものを契機として、「引揚げ」や「植民地」という観念までもを解体しつつ、新たな問いを立てていくことにも開かれているように思われるのです。

注

- 1) Cf. 鶴戸聡「アラブ・フランコフォニーと越境の文学：アルジェリア、レバノン、エジプト」土屋勝彦編『反響する文学』風媒社、2011年、19-59頁。
- 2) 個人的な体験ですが、ムールード・フェラウンという「マグレブ文学初の大作家」の「暗殺五〇周年記念シンポジウム」に招待された際、聴衆から「なぜフェラウンは独立戦争に参加しなかったのか」といった非難がましい質問が幾度も投げかけられ、文学を語る場が政治的な雰囲気にも圧迫されることにはささか衝撃を受けたことを思い出します。
- 3) どのような「植民地」であったかは場合によっては重要な論点となります。個人的な経験で恐縮ですが、ベイルートでアルジェリアとレバノンのフランス語文学について発表をした際に、現地の研究者から「レバノンは委任統治領であって植民地であったことはない」と断言されたことがあります。両国は独立後もフランス語が残留しており、現在に至るまで文学言語としても用いられていますが、アルジェリアでフランス語が「戦利品」(butin de guerre)と呼ばれ、愛憎半ばする屈折した文学言語に鍛え上げられてきたのに対し、オスマン朝支配に抗うための「文明の言語」として称揚されたこともあるレバノンのフランス語にはむしろフランスとの結びつきを肯定的に誇示するところがあります。
- 4) 高名なカミュ研究者のピエール＝ルイ・レイは以下のように述べています：「カミュの政治的立場は、彼が決して植民地化 (colonisation) を罪 (péché) とは考えていなかったことに尽きるだろう。歴史を遡れば遡るほど、諸国民 (les nations) は常に打ち続く侵略の波によって構成されて来たのであり、アルジェリアにおいてはアラブ人自身もまた、とある時代には侵略者であり植民者 (colonisateurs) であったのだから。ところが、「コロニアリズム」の方は、彼の筆の下で侮蔑的な語義を取っている。それは、ある国の新しい占拠者が、彼らよりも前にそこ住んでいた人々に政治的社会的な平等を与えることなく、支配的な地位を自らに保証したものと考えられているのだ」(Pierre-Louis Rey, "Les «Arabes» dans l'œuvre de Camus, *Etudes Camusiennes*, vol. 10, Section japonaise de la Société des Etudes camusiennes, 2011, p. 59)。
- 5) エスニシティとブラジル人アイデンティティの関わりについては、ジェフリー・レッサー『ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の構築：「ブラジル人らしさ」をめぐる葛藤と摸索』(明石書店、2016)が興味深い視点を提供してくれます。
- 6) 現在使われるような意味での「植民者」という語は、「植民地」から派生した「不道德」あるいは「不正義」な存在を遡及的に指示するように思われます。なお、フランス語の colons (植民者) も Pieds-Noirs (引揚げ者) もアルジェリア独立前後に後発的に作り出され、遡及的に用いられるタームです。
- 7) ムスタファー・ベンフォーディル (鶴戸聡訳)「バリーアルジェ便、地獄クラス」中東現代文学研究会編『中東現代文学選 2012』2013年 (非売品)、425-438頁。
- 8) Cf. 足立綾「ピエ・ノワールを名乗るということ：過去の共有を求めて」石川真作他編『周縁から照射する EU 社会』世界思想社、2012年、63-86頁。
- 9) 台湾の島田謹二がフランスの「外地文学」との比較において構想していた「湾生文学」の途絶はそれを端的に表しています。Cf. 橋本恭子『『華麗島文学志』とその時代—比較文学者島田謹二の台湾体験』三元社、2012年。
- 10) Cf. Satoshi UDO, "Insularity in the Literary Imagination of SHIMAO Toshio", Yamamoto S. & Raharjo S. eds., *New Horizon of Island Studies in the Asia-Pacific Region*, Occasional Papers No.54, Kagoshima

University Research Center for the Pacific Islands, 2014, pp.75-78.

- 11) 「ところで、昭和二十年一月その当時では、日本近海の制海権は既に米軍に奪われ、南方行きの輸送船は、台湾へ着くまでに殆どの船がアメリカの潜水艦の攻撃を受けて沈められた。無事に台湾まで行き着くことは考えられなかった。私たちは沈められるのを覚悟の上で輸送船に乗る日を待っていた」（庄野潤三『文学交友録』新潮文庫，平成十一年，159頁）。
- 12) 「ひとところに暮していると、長い年月の間にそこでいちばん住みよいようにあらゆる努力をしているものだ。そうして、うまく行かないことは目立つが、うまく行っていることというのは案外、目立たない。それらは、一日にして成ったことでなくて、木のひげ根が邪魔になる石をよけたり、ほかの木の根の間をくぐったりして、何とか都合をつけて、水と養分を送っているようなもので、掘り起こしてみてもそんなことは分らない。

家を引越すということは、こういうひげ根をすっかり断ち切られるのと同じで、そこがつらいところだ。しかし、そんなことをいっても始まらない。ここへ引越して来たのは、やはり引越して来るだけの何かがあったからなので、それはやっぱり縁があったということではないだろうか。それなら、前のひげ根のことは思わず、ここで少しでも早くひげ根を下すことを考えた方がいい」（庄野潤三『ザボンの花』講談社文芸文庫，2014年，12-13頁）。

